すれば、それは電子の直径が０よりも大きかったなどということに依るのではなく、何かもっと論理的な限界だと思うのだ。$\mathcal{M}$や$\mathcal{F}$が何かというレベルではなく、$\mathcal{M}$や$\mathcal{F}$が存在するか否かというレベルで限界が現れるのではないかと思う。実際、古典論から量子論への移行は、そういう形で起こっている。

さてそれでは、§2-1と§2-2で定義した理論の各々について、条件１～４のそれぞれが成り立つか否かを見てみよう。結果は下表のごとくだ。

	条件１	条件２	条件３	条件４
T_1	×	○	×	○
T_2 (n≧2)	×	○	×	○
T_3	×	○	×	○
T_4	△	×	×	○
T_5	△	×	×	○
T_{12}	×	×	×	×
T_{14}	○	×	×	×
T_{15}	○	×	×	×
T_{02} (n≧2)	×	×	×	×
T_{04}	△	×	×	×
T_{05}	△	○	×	×
T_{22}	×	×	×	×
T_{24}	○	×	×	×
T_{25}	○	○	×	×

条件１を書くのに使った**自然全体の歴史**という語は、本書全体を一つの物理理論と見たときの基礎未定義語になっている。したがって定義されない。自然全体の歴史を自然の可変的な部分の歴史とすることは、だいたい環境条件が無いとすることと同じだ。T_4, T_5, T_{04}, T_{05}には環境条件があるが、これらの理論では環境条件と自然の可変的な部分の歴史の論理積を、新たに自然の可変的な部分の歴史だというように定義をやり直しても不都合は生じないので、条件１の欄には×印